

## はじめに

この冊子に収められているのは、一九七〇年代からレズビアンのための活動に関わってきた方々の話をまとめた、口述の運動史である。まずは、この冊子ができた経緯や内容、手順などを簡単に説明したい。

### ドキュメント収集への関心

今年四〇歳になる私（编者）が「レズビアン・コミュニティ」と関わりをもつようになったのは、一九九五年のことである。ちょうどL O U D「が開設された頃だった（一九九五年六月）。日本はその後十年に及ぶ長期不況に入っていたが、L O U Dを中心とする東京の「コミュニティ」は、不景気を感じさせないほどのエネルギーに満ちていた。私は、そこに集う二〇代、三〇代の女性たちと知り合い、大学院での研究の傍ら、運動のようなものに少しずつ参加するようになった。知り合えた女性との関係を深めたい、彼女と一緒に何かをやりたいというのが参加の主な動機だったが、ともあれ知り合う場、活動の場はすでにそこにあった。

最初に「コミュニティ」の歴史に興味をもったのは、一九九七年に「ウーマンズ・ウィークエンド」（第八回、十一月一日〜三日）のオーガナイザー（世話人）をやったときだった気がしてい

「レズビアンとバイセクシユアル女性をはじめとするセクシユアル・マイノリティーズのためのフリースペース。」

る。このウィークエンドは、バイセクシュアル女性を中心に発足した、女性のための交流イベントである。第一回は「♀（女）達のウィークエンド」として、一九九三年五月五六日に千葉で開催されている。毎回、異なるオーガナイザーに引き継がれ、二〇〇八年十一月には二十一回を数えた。

第八回の担当者として前回のオーガナイザーから引き継いだファイルには、第一回から七回までの資料が綴じてあった。第一回のプログラムは、英語で殴り書きされたメモのようなものだったが、手作りの資料を見て、我々の世代にとって「すでにそこにある」ものも、誰かの尽力によって何もないところから作り上げられたのだという、当たり前のことを意識した。聞けば同様のイベントは一九八〇年代からあるという。「いつ、誰が、どうやって？」という素朴な好奇心にかられた。

活動の記録を継承していくことの難しさを知ったのは、その五年後である。私は第十五回（二〇〇二年一月一―三日）に再度オーガナイザーをすることになったが、前回からの引き継ぎ資料のなかに、第八回以前の資料がないことに気づいた。そうなると第一回から第八回までの日程さえわからない。自分の関わった第八回の資料はさすがに家のどこかにあるだろうと探してみたものの、何も出てこなかった。運営を統括する永続的な組織があるわけではないこと、すべての回に参加した人がいるとは思えないこと、いたとしても全部のプログラムを保管していると期待できないことなどを考えると、八回以前の資料を探して揃えるのはとても無理だと思った。

幸い、他の第八回オーガナイザーの部屋からそれは出てきた。ちょうど引越しをしようとして荷物を整理していた彼女が、八回以前の資料がファイルされたクリアブックを「発見」したのであ

る。引き継ぎミスをしたのは当の自分たちだった、という間の抜けた話だが、しかしこの一件から、草の根運動の記録は、保管しようとするそれなりの意思がなければ、たやすく失われることを学んだ。「場」を作るために注がれた労力や思いの大きさに比べたら、あまりにあっけなく。一人焦った私は、とりあえずそれまでのプログラムを（無断で）コピーして手元に置き、さらにウェブサイトを作って全プログラムを掲載した。

以来、自分の行きあった「コミュニティ」とつながりがあると思われる運動のドキュメントを努めて集め、所蔵するようになった。

### ドキュメントにはない経験・記憶の記録を

「仲間や支援者が集う空間や共同性を創造する」という点において、ミニコミ誌が果たした役割は大きい。一九八四年の創刊以来、発行を続けている『れ組通信』の全号を揃えなくなった私は、発行元の「れ組スタジオ・東京」（以下「れスタ」）にバックナンバーのコピーを頼みに行った（二〇〇六年十月頃）。今回インタビューをお願いした麻川まり子さん（二章）、若林苗子さん（二章）、神楽じゃむさん（四章）とは、れスタで知り合った。七〇年代という早い時期からネットワーク作りに貢献なさった方々である。

れスタの「オープンデー」や『れ組通信』の発送日にお邪魔すると、私の興味関心をご存知の皆さんは、よく昔の話をして下さったが、そのほとんどが知らない話だった。コミュニティ形成の鍵となった出来事やエピソードが記録されていないことがわかり、この頃から「いつか皆さんにインタビューをお願いしたい」と切望するようになった。

沢部ひとみさん（二一章）と初めてお会いしたのは、二〇〇七年の六月である。沢部さんが講師をなさった「パフスクール」(<http://pafschool.blog118.fc2.com/>)二〇〇七年前期講座「女を愛する女たちの物語」に参加したのである。全六回の充実した内容だったが、第四回「レズビアン・フェミニストの登場」（二〇〇七年八月二十一日）のことは、とくに印象に残っている。

沢部さんは、リブ新宿センターに行ってから（一九七四年）『女を愛する女たちの物語』（JIC C、一九八七年）をご自身で編集するまでのことを、時代背景とともに具体的に話された。ここでも記録されていない経験や記憶の膨大さに圧倒された。同時に、一九四〇年代、五〇年代生まれの方々、一九六〇年代以降に生まれた我々との経験と記憶の断絶が大きいことも痛感した。

七〇年代、八〇年代のことを知るにつれ、それを記録に残したいという思いは強くなったが、インタビューを申し込んでよいものか、かなり逡巡した。というのも、皆さんが表現者なのである。沢部さんはプロのライターであり、れスタの方々も『れ組通信』という媒体で二十年以上、書き続けている。自分の経験や記憶を記録することの意義も、それを次世代に伝える必要も、皆さんが充分に承知しており、機会があれば自らまとめたいとお考えであることも解っていた。「誰かに資料にされるより、自分で資料を作りたいだろうな」と思うと、なかなかインタビューを申し込めなかった。そんな頃、財団法人東海ジェンダー研究所に応募していた研究助成に通じ、それに後押しされて何とか一歩を踏み出すことができた。

第五章のRINさんは、れスタで知り合ったある方が「RINさんならきつといろいろのことをご存知だろう」と紹介して下さった。美大出身のRINさんの主な表現方法は絵であり、当時の作品をいくつか掲載させていただいた。第六章のミナ汰さんは、二〇〇八年一月に発足した

「共生社会をつくる」セクシユアル・マイノリティ支援全国ネットワーク」で活動をとにもするなかで、関係を深めた。八〇年代から九〇年代初めにコミュニティ活動を支えたお二人である。第七章は、RINさんにご紹介いただいたNさんへのインタビューをもとに、七〇年代初めの「レズビアン・バー」の様子をまとめたものである。六〇年代後半から七〇年代初めに多く存在したという「レズビアン・バー」の記録はあまりない。この冊子のテーマとは少しずれるが、今後の調査の足がかりになればと思い、掲載した。

### インタビューの目的・口述史編集の手順

私の興味は、いま現在私が支援し支援される「場」の成り立ちを記録すること、すなわち「首都圏のレズビアン・コミュニティ」がどのように形成されていったのかを具体的に記録することにある。したがって、私がインタビューのために準備した質問は、いわゆる「運動」に関することに限られている。

とはいえ、運動への参加は、生活環境に少なからず規定される。ここに口述史を掲載した六名の方々も、たとえば金銭的・時間的・精神的余裕があるときに参加し、余裕がないときは距離を置いたりしている。活動への参加を促したり支えたりする私生活の状況を聞き取ることも大切であるが、今回は「コミュニティ活動」と呼べるような経験を中心に聞いた。

やりとりの録音時間は、一人あたり二時間から四時間ほどであった。それを私が書き起こし、編集したものを六名の方々に二度チェックしていただいた。脚注は私がつけたが、それも確認していただいた。クレジットは「語り手」のものとしたが、どの口述史は私の関心に引きずられた

内容となっている。記録に残したかったことが双方で一致していたわけではないし、語られなかった重要な出来事も多くあると思われる。何が話され、話されないのかは、私の関心だけでなく、私との関係性やいまのコミュニティ状況などにも枠づけられる。きっと皆さんの手になれば、違う観点からもっと面白く詳細な口述史が書かれるだろうし、いま書けなくてもいつか書けるようになることもたくさんあるだろう。いつかご自身によって別の切り口から体験談が書かれることを楽しみにしている。

第一章から第六章までは、活動への参加時期が古い順に並べた。前から読んでもらうほうがわかりやすいと思う。理解の補助となるように「コミュニティの活動年譜」を作成していたのだが、間に合わなかった。これまでに収集したドキュメントの書誌も掲載したいと考えていたが、これも整理が途中である。インタビューをしたが諸事情により掲載できなかった口述史もある。いずれ第二号を出して、それらを掲載したいと考えている。

タイトルを「日本のレズビアン・コミュニティ」としたが、内実は「東京の……」である。このタイトルがはったりで終わらないように、今後も聞き書きを続け、地方の状況やつながりについても記録していけたらと思っている。

この冊子が発行できたのは、話をしてくださった方々の多大な協力のおかげである。心から御礼を述べたい。また、財団法人東海ジェンダー研究所から受けた研究助成は、インタビューの実施と冊子の印刷に不可欠のものだった。機関誌『ジェンダー研究』第一号には、研究の成果が発表できることとなった。記して感謝したい。